



〔件名〕“ここにいてもいいんだよ”

こんにちは。名古屋は夏真っ盛りです。沖縄は、空も海もいちばんきれいな季節でしょうね。

私は、19歳のとき映像制作を学ぶためにアメリカへ留学しました。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校は総合大学で、映像制作だけでなくアメリカ手話を学ぶ学科があります。聞こえる学生が2万人、ろうの学生が250人在籍するマンモス大学です。80人に1人がろう学生なので、キャンパスを歩いていると、あちこちに手話で会話しているグループを見かけます。私は手話通訳をつけて映像制作の講義を受けました。通訳といってもアメリカ手話で、日本手話とまったく違うので最初はついていくのがたいへんでした。アメリカ手話を知らないまま留学したので、現地で覚えました。

私は寮で生活していて、ルームメイトは手話通訳を目指して手話を学んでいました。とても明るい性格で歌や踊りが好きな人でした。彼女の友だちが部屋に遊びに来たときのこと。聞こえないのは私一人です。その友だちも手話ができて、ルームメイトと手話で会話をしていました。すると、ルームメイトが突然泣き始めたのです。私が驚いたのは、彼女が泣いたことよりも、自分の感情を手話で友だちに伝えたことです。2人も聞こえる人なのに、部屋にいる私の存在を気にかけて手話で話したのです。悲しいときも。とても新鮮でした。日本では、手話ができる人でも怒っているときや悲しいとき、忙しいときは声になってしまったので。あなたはここにいてもいいんだよ、と私の存在を認めてくれて、とてもうれしかったことを今でも覚えています。「悲しいときも手話を使ってくれてありがとう」とあとでお礼を伝えたら、「同じ場所にいるから当然のこと」と笑っていました。

井上さんは、自分の存在を認めてもらってうれしかったことはありますか。

いまむらあやこ



メールで会えたら

映像作家・今村彩子

海洋写真家・井上慎也
(うみまーる)



〔件名〕Re：“ここにいてもいいんだよ”

こんにちは。アメリカ手話を知らないままアメリカの大学に留学して、現地で手話を覚えながら映像制作の講義を受けるなんて、すごいバイタリティですね。

僕は手話ができないので、コミュニケーションは筆談なんです。メモ帳とかがその場になければ、手のひらにひらがなで書いてもらって話の内容を覚えてもらうんです。数人の友だちと雑談しているときは、その中の一人がそんなふうにして通訳してくれます。でも、話が盛り上がってみんなで大笑いしているようなときは、親切な友だちでも「(通訳は)ちょっと待って」ってなりますよね。僕もいっしょに笑いたいから、そのちょっと待つ時間が、高校生のころまではとてもやるせなかったんです。

大学でダイビングクラブに入って、うまくなりたかったから欠かさず活動に参加して練習もがんばりました。そして、もっとダイビングのことや海のことを知りたくて先輩にいろいろ質問すると、誰もがとても親切に教えてくれるんです。それが僕にとって、存在を認めてもらえてうれしかったという経験でしょうか。熱意をもって聞けば、耳が不自由でもちゃんと教えてもらえるんだと気がきました。

ダイビングは楽しいですよ。いろんな生きものたちと出会えるし、無重力のような状態で、空を飛んでいるみたいに遊泳できるんです。それに、水中ではみんなしゃべれませんが、耳が不自由ということがハンデになりません。それどころか、手話ができる人同士なら陸上と同じように会話できます。僕は、パートナーの‘あーす’（高松明日香）とは指文字と読話で話していますが、水中では指文字だけで会話します。出会った生きもの名前とか簡単な会話なら、指文字だけでも大活躍です。

僕の場合、海洋写真家をしていて耳が不自由なことでハンデを感じることはほとんどないのですが、今村さんは、映像作家という仕事の中でハンデを感じることはありますか。

いのうえしんや

